



106号 400円

東
海
B
O
C
か
ら

歩き出した主婦たち…3

奥村和子・立木侑代・渡久地政子
米川佐和子・岩田和子・岩崎信子
二宮純子・金子富子・森川久美子
諏訪部美和子・横田美佐子・石岡幸子

老人を介護して 石川房子……12

国家秘密法を廃棄させる女たちの会 ほか…19

<広島『あごら』を読む会>を ほか……19



立木侑代さんの“欧風家庭料理”2号店

各地の〈あごろ〉へどうぞ (カッコ内は
例会日と会場)

☐あごろ旭川 (第3土曜・13時30分—16時)

- ・北海道上川郡東川町西5号南3 小坂啓子
- ・☎ 0166=82=2598 〒071-14

☐あごろ札幌 (毎月13日喫茶「ミドリ」)

- ・札幌市豊平区平岸1条1丁目6-110 細谷洋子
- ・☎ 011=823=0738 〒062

☐あごろ仙台 (時間、会場とも流動的)

- ・仙台市茂庭字生出前4-65 三船照子
- ・☎ 0222=45=5994 〒982-02

☐あごろ柏 (時間、会場とも流動的)

- ・千葉県印幡郡白井町大山口1-7-20 桑原ちゑ子
- ・☎ 0474=91=4843(夜間) 〒270-14

☐あごろ新宿 (第1金曜・18時—19時30分
毎月8日(水、土、日にあたる)
時はその前日) 10時—13時)

- ・新宿区新宿1-9-6 斎藤千代
- ・☎ 03=354=3941 (BOC) 〒160

☐あごろ武蔵野 (第4土曜・19時
かわら版事務所)

- ・小平市小川町1-763-86 丹羽雅代
- ・☎ 0423=43=6749 〒187

☐あごろ京王 (第2水曜14時—16時
福井宅または調布婦人会館)

- ・調布市仙川町3-12-32 福井浅子
- ・☎ 03=308=7871 〒182

☐あごろ湘南 (休会中)

☐あごろ東海 (時間、会場とも流動的)

- ・名古屋市中区平中町90 長谷川友子
- ・☎ 052=501=6969

☐あごろ京都

- ・京都市左京区一乗寺築田町56-1 塚崎美和子
- ・☎ 075=791=4623 〒606

☐あごろ大阪 (第3日曜・11時30分—15時)

- ・吹田市岸部中1-29-4 藤井里子
- ・☎ 06=387=6574 〒564

☐あごろ山口 (第1日曜・11時—17時
森川宅)

- ・下関市長府黒門東町1-15 森川万智子
- ・☎ 0832=46=3181 〒752

☐あごろ九州 (第2土曜・14時30分、第4土曜
18時30分、福岡市立婦人会館)

- ・福岡市中央区笹丘2-4-6 小島サカエ
- ・☎ 092=521=7624 〒810

☐あごろ佐世保 (第2・4金曜10時30分—
12時、佐世保市立図書館)

- ・佐世保市瀬戸越町1415-25 内田佳崇
- ・☎ 0956=49=8591 〒857-01

☐あごろ鳥取 (準備中)

- ・鳥取市古海1147 高草団地9号 前田享子
- ・☎ 0857=23=3074 〒680

好評／絶讃の声が続々!!

山下智恵子著

幻の塔

——ハウスキーパー熊沢光子の場合

四六上製本 至1600

昭和十年、二十四歳の若さで獄中に自死した熊沢光子。彼女の生の軌跡は、これまでほとんど明らかにされてこなかった。良妻賢母のための教育を受けながら、貧富の差を生む社会構造を憎み、安穩な生活を捨て自ら困難な運動に飛び込んだ光子。が、「その人に尽くすことが革命や人民のため」と信じて「ハウスキーパー」になった相手は特高のスパイだった。長い歳月をかけ重い資料をたずねて生まれた長編。「ハウスキーパー」の実態に鋭く迫る。

BOC出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
電話03(354)3941 振替東京3/39331

歩き出した主婦たち

主婦が歩き出している。

足を出したり引っこめたり、長い模索を続けてきた主婦たちが、一歩、また一歩、確実に前進している。私たちへあごろ東海Vが発足した十一年前は、集まることも容易ではなかった。でも、集まることから「始めた」とき、「何か」が少しずつ「始まった」と思う。

みんなが最初に模索したのは、「社会参加」、——まずは「就職」だった。

しかし「均等法」も生まれていない当時、三十すぎた子連れ女たちに、就労の門は狭かった。

女同士、助け合ってやるっきゃない。——五年前、八東海BOCVをスタートさせた。

「働く」ことに焦点を絞った八東海BOCVも、働く場を確立できたわけではないし、みんなを抱え込むゆとりはまだ生まれていない。それでも、出会い、語らい、失敗をわかち合うなかで、それぞれの歩みが始まった。

ここに紹介する八東海BOCV周辺の十一人は、そのほとんどが、「雇われる」という形ではない「経済的自立」の道を選んだ。

完全な「自立」にはまだ至らない人もいるが、内側にこもり、自嘲するだけの生活とは、それぞれ大きく変わった、と思う。

「私ら、「均等法」からも締め出されてるもんね」と、私たちはよく語り合ったが、しかし考えてみると、「均等法」は主婦とかかわりがないわけでもなければ、多くの主婦が「均等法」から締め出されているわけでもない。

「平等法」目指して命を削る運動を続けてきた女たちの苦労が、私たちの歩みを軽やかにしたのだと気がつく。

四月一日、「均等法」がスタートする。募集・採用から、定年・退職まで、男女差別をしてはならないと義務づけたこの法律は、否応なしに女が働くことについての社会通念を変えていくだろう。「雇われる」形であらうとあるまいと、新しい女の世紀が開ける。

(奥村和子)

“歐風家庭料理” 二号店開業

立 木 侑 代

戦後民主主義の世に育った私たちの世代は、努力すればどんな地位にもつけるという幻想の下に生きてきた。

学校卒業後、職業を持ちたい、一人の人間として親から独立したいと切望したが、当時の私に就職の機会はなく、結局家事見習の後、結婚をした。

就職、それは私にとって無いものねだりをするようなものであった。これといつて特技もなければ、何の経験もないのに、人さまに使ってもらって給料をいただく、しかも自分に合った仕事が欲しい、ただただずっとそう思い続けていた。私にも何かできるのではないかと漠然と自分に甘い期待をしていたにすぎない。そして、やっと四十歳をすぎて初めて会社社員と呼ばれる経験をした。それは八か月の短い期間で終わった。

ほどほどということを知らない私は、

人の間に入って、協調しながら何かをしていくことが上手でなく、一生懸命になりすぎて自分だけが空回りしてしまいう性癖の持ち主であるらしい。なんのことはない、世間はそれを受け入れてくれなことを、遅ればせながら知ったということにすぎない。世慣れた人が大勢いるのに、ぼっと出の主婦にそう良い仕事があるわけがない。自分でも、もてあまし気味のこの特性を生かすには、自営業のほうが良いと気づき、始めたのが喫茶店ハティンカーベルである。やっと私の仕事と言えるものが見つかった。

がむしやらな五年間が過ぎた。自営、零細企業、競争社会、一時も、気の安まらない日々。中小企業経営のむずかしさをいやというほど知った。一途な私を陰になり陽なたになりささえてくれる家族の理解と援助。“しなくとも良いことをして、自分自身を苦しめている”と、ふとそんなふうに思うこともある。でもやっぱり何かをしなくっては生きていけない。やっと見つけた仕事なんだから。

の。続けなければ。

女は度胸。女は度胸。と自分を暗示にかける。そして二号店出店の計画を練る。喫茶店開業の折、あれほどきつかった金融機関が、二号店出店の話には、スムーズに相談に乗って来た。金融市場の変化もさることながら、少しは実績が認められたのであろうか。五年あまり前より世は一層不景気である。私に課せられた責務は大きい。開店一か月になるが、予想売上げには程遠く、眠れぬ夜がしばらく続きそうである。頑張らなければ。欧風家庭料理の店ハアンブロンブテュVの経営が、一日も早く軌道に乗ることを願って。

わたしは“世帯主”（学習教室）

石 岡 幸 子

主婦の再就職には、年齢制限や特技のなさなどから、条件が限られてしまします。私も子どもが幼稚園に上がる少し前から内職を手始めに、あれこれ職をさが

しました。母親の立場から何か子どもにかかわる仕事はないかと、保母の資格を取るため通信教育を受け始めました。ピアノも習いました。しかし、元来が長続きしない私のこと、家事の合間や夫や子どもが眠った後の一人勉強、よほどの精神力がないと、続きませんね。その間、子どもの病気や自分のけが、また資格を取得した後の就職難等、やっぱり困難が山積みです。そしてある日、見つけたのが今の仕事。算数を中心とした学習教室は、長く家庭の中でもんもんとしていた気持ちを外へ向けさせ、社会の一員とさせてくれました。最初の目標である子どもとかかわっていられる仕事であり、生産性のみのため労力を切り売りするだけでなく、やりがいを持つことができ、再就職としては成功のようです。

今、こうして書くことができるのも、仕事について七年、その間、離婚というハンディを何とかが乗り越えてこられたからかもしれません。子どもと三人で五年目をすごしています。離婚当時のあの

バイタリティは、今はなつかしいことです。が、結婚するはたやすく、離婚するのは何とエネルギーがいることか。仕事の合い間に、ごちらの役所あちらの役所と何度足を運んだことか。

現在、女性の改姓が話題にされていますが、私の場合は、離婚後の姓をどうするか悩みました。仕事の上で改姓後のわずらわしさがありますし、何しろ子どもに負い目をおいさせたくなく、続けて夫の姓を名のことになりました。一番離れたかった姓なのに……でも現在は、悩んだことも昔のことになりました。それにしても女性も個人として名前を持つことができれば、改姓などということもありませんの。

夫からの支送り以外、毎月一定の収入はなく自転車操業、自営業の悲しさでやりくりが大変ですが、自分なりの努力がむくわれることもあります。また、ある程度子どもたちと接する時間があることは、嬉しいことです。そして地域の一人として、他の一般家庭と同じ役割をはた

せることも、今の私の誇らしさです。保護者の名を書くときも、犬の所有者名も、電気代、新聞代の領収書も私の名前。扶養家族ではなく世帯主なんだなど。無理せず心の余裕を持って生活してゆこうと思います。

“主婦”という肩書きで働いています

(企画・調査のチームを作って)

米川 佐和子

今年二月頃からABC東海Vの奥村さんの紹介で家電メーカーに週一回くらいの割で行っています。当初の先方の意向は、「家電製品を男ばかりで作っていると市場調査で数量的には女の人の意見がつかめても、いまひとつ生の声がわからないので三十代以上の生活者を標準スタフにしたい」というものでした。とはいっても、双方とも、何をしたらいいのかやらせたらよいのかわからず、あまり仕事らしい仕事もないのに月決めの報酬をもらう月など気もめましたが、少し

ずつ軌道に乗りつつあります。

仕事の内容は、アンケート調査の企画、実施、整理や商品のモニター、企画案の作成、本のレポートなどですが、この夏から社員三名、プロの広告プランナーと生活者代表ということで私も参加させてもらい、女性だけのチームができました。この五人の20代、30代の女性チームで大阪と名古屋を行き来しながら、何か新しい提案ができるように仕事を進めています。この仕事をするためにたくさん主婦や女子大生に面接しましたが、グループごとに生活理念がまったく違うので「主婦」という大雑把な言い方はできない時代だと改めて痛感しています。これだけ定期的できちんと収入のある仕事は専業主婦七年間で初めてなので、最初はずいぶん気負っていましたが、アマチュア感覚が求められているのだからそう固くなることもないと、余分な力を抜こうとしているところです。

△びゅうVや△東海BOCVの「主婦の壁を破るセミナー」などから広がった

人間関係の中で、何でも言ったことをそのまま理解してもらえていた温室から一歩外へ出て、同じように振る舞っても「極端なことを言っている」としかとれないこともあり、「表現の仕方」も研究課題です。女性チーム五人の中でも、三人は独身、子持ちは私一人なのですが、なぜか私が言うことは一番ラディカルに聞こえるらしく、説得力のない「変わった意見」に終わらないように、「人にはどう聞こえるか」というところに努めています。まだまだ、場数不足、経験不足で、先に見えるような状況ではないので、待遇面では現在の状態が妥当ではないでしょうが。相変わらず週一回出社、自宅の作業が少々という「少ない働き方」なので、主婦という肩書でということは、肩書きがなければこの辺が限度でしょう。

一歩外へ出たことで小さい人間関係は小さい人間しか作らないというシビアな事実が気がつき、もっと何でもやってみ

ようという気持ちになってきました。「仕事があるから」と言うほどの量でもないで、地域の仲間と家事代行チームを始めたり、おやこ劇場の地域での役も引き受けたり、同年代の知人に（何と？）バレエやパッチワークを習い始めたり、広く浅く動き出しました。そのうちまた転職がやってくるのでしょうか、それまでは自分と逆らわずに、無理も少々しながらやってゆくつもりです。

度胸一つでやっています（ライター）

岩 田 和 子

私がフリーライターになろうと思ったのは、一つには子どもが小さく、夫に輸動がある、ということのためだった。フルタイムと違い比較的時間が自由になりそうだし、それに「書く」といのは一つの技術でもあるから、ある程度経験を積みめば、転動して他の土地へ行っても役に立つのではないかと思ったからである。しかし書く仕事なんていうものは、普

通の事務などのように新聞の募集らんを見ていてもまず見つからない。私の場合、運がよかったのは、△東海BOCVを教えてくれた友人がいたことだ。子どもを連れて初めてここを訪ねたのが今年の二月、そしてその子が幼稚園へ上がった四月に、△BOCVを通して私はある

新聞社のホーム・リポーターという仕事をするようになった。これは新聞記者が気づかないような身近なトピックスやユニークな人物を取材して記事を書き、必要な時は写真も撮って社へ持ち込むのである。初めのうちは、あちこちの友達に片っ端から電話をかけて記事になりそうな話を聞きこんだり、あるいは飛び込みで全く知らない人と会ったりもした。とにかく「取材」なんて全く未経験のこと、度胸一つでやるしかなかった。レポーターをしてお会いした方々からは、ライターとしての勉強もさせていたほしい、人間として学んだこともたいそう多い。

現在では、このほかにリライト、広告、

講演の記録など、いろいろな仕事ができるようになった。仕事を通じてたくさんの人と知り合い、そこからさらに他の仕事へとワクが広がっていくのはそれ自体うれしいことだが、自分自身の視野もだんだんと広がっていくのは大変しあわせなことだと思っている。

正直いって以前はフリーライターという、文才のある人がするカッコいい横文字職業、というミイハリの思い入れがなくはなかった。しかし実際はカッコいいどころか、内職的な泥臭い仕事だ。たった数行の文章のために、食卓の上を反古紙だらけにしなが、深夜一人、悪戦苦闘しているのだから。昼間勤めに出なくてすむ分、書き上がるまでは徹夜もやむを得ない。また次の仕事をとるためには、多少無理しても来る仕事を断わって

はならない。
しかし一方で、どんな文章も一回で難なく書けるほどの文才の持ち主だったら、私はライターなど馬鹿馬鹿しくてやめてしまったかも知れない。苦勞の割に

は決して報酬が高いとは言えないけれど、一つの文章を書き終えた時の安堵感や喜びは、何ものにも換え難いような気がするから。

合理化の中で働く意義を考える

岩崎信子

民間の会社の栄養士として働き十年目にさしかかり、三人目の出産を迎え、それと同時に、食堂下請化問題が出された。

今までにも、何度となくこの問題が出されましたが、そのたびごとに働く意欲だけはそがれながらも現実には実現されない中で「またか」の気持ちがり返されて来ました。下請の話が具体的に出版されて半年ほどで七名の職場移動が決まり、お互いの経済的なこともあって、工場のライン作業で働く人、退職届を出す人と、今まで人間関係があったつもりの私たちの職場もこの合理化でみごとに分断され、その中で私だけは、事務職に移

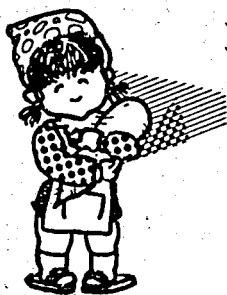
動になりました。

産休後職場復帰し、毎日、お茶くみ、電話当番、単純な仕事を与えられ、なにかあった時はどこにでも対応のきく内容のことばかりの事務仕事、女性だからというところであたえられる仕事の中で、初めて自分自身がなんのために働いて来たのかを考えさせられました。組合運動など経験した私は、取られたものを取りかえすことばかり考え、そのことに疑問を持つようになって来ました。

その頃、東洋医学のドクターを知り、今まで考えてみたことがない世界を知らされました。そして自分の枠の中で自分のためにだけ生きていたが、自分を生かしてくれる世界が自分の中で表裏一体となっている神とか仏について考えたこともなく、「宗教は、アヘンである」とさえ思って来た私が、ある体験をすることができました。それは、自分の中の「守護霊」を見たことでした。見ることで、好きな人にとって信じがたいことだと思えるのですが人間には誰にでも守護神は存

在するということを体験させられました。それ以来、私は、合理化の中で人間が持っている計算をしたところでその計算が自分だけを救おうとするところで出発していた枠を取り払い、「この一つの出来事が自分にとって何を意味することなのか、肉眼で見、心眼で感じることに、自分の肉体の中にあるもう一つの世界が要求していることなのだ」と知らされた思いです。一つ一つ苦しみの中にも安心を与えられる事柄で私にこの世界を与えられたのだとしたら、私もこの考えを広めていきたいと考えています。

昨年の九月いっぱいでは会社をやめ、健康のために何をすべきかの道をさがっています。それが私の経済的自立につながるよう努力しつつ。



再出発して六年たって（弁護士）

二 宮 純 子

三年間弁護士をした後、結婚退職し、専業主婦を九年間。意を決して、事務員も雇わずとにかく再び弁護士事務所の看板をあげてから六年たった。予想したよりもっと細々とだが、事務員一人と忙しく働いている毎日である。以下、思いつくことを三つ。

一、女性名を揚げた法律事務所の名前

私の事務所は「二宮純子法律事務所」という。最近、ある人から「名古屋は女性の名をつけた事務所がわりとありますね。東京じゃやっていけないと聞きました」と言われた。東京の事情は知らないが、私が女とわかる名にしたのは、客から「何だ、女か」という顔をされるのが不愉快だと思ったからだ。私がそんな感覚だったから、私がやらない事件を他の女性弁護士に紹介するとき、その弁護士に不快な思いをさせては失礼と思い、

予め「女性ですが、いいですね」と念を押していた。しかし、ある時、友人の女性弁護士から「それじゃあ男女差別を認めてみたいよ。何だ女かと思われるぐらい、皆、覚悟してるよ」と言われて、態度を改めることとした。確かに、そんなことでめげてはいられない。

二、お客さんの獲得

弁護士事務所は、依頼者が来てくれなければ困る。私などそのための努力が足りず、顧問会社も一軒もなく、まさしく落ち穂拾いだから語る資格もないが、やはり、男社会だと感じる。例えば、女の友人の相談にのっていて、裁判所に訴える段になったら、「夫の会社関係や兄の知人の弁護士に頼むことにした」と言われた時などくやしかった。もちろん、私に魅力がないせいもあるが、彼女の夫や兄に経済力があるので、決定権を握られるのだらうとも思った。そんな事件が解決せず、結局、また、私に依頼された時はうれしかった。

社教センターで女性問題を講演した

り、マスコミに出たりすると客が来ると思う人もいるようだが、私の場合、そういうことは全くと言ってよいほどなかった。事件の依頼は、もっと個人的なつきあいからだと思う。だから、共に飲食をしたり、趣味等を通しての交際は大切だと思う。それも男性相手のほうがよい。

しかし、女で家庭持ちの場合、家事や夫からの制約で、なかなかむずかしい。

昨年四月から、私の夫は、徳島へ単身赴任し、小四と中一の子と私は名古屋なので、前より夜の外出が自由になった。そこで、せめて女性弁護士と会食したりして、仕事のための情報を得たり、事件処理の愚痴を語りあったりしはじめたところだ。

三、自信喪失と回復

開業五年目の年は、仕事のむずかしさが自覚されてきたことや四十すぎの記憶力減退。それに夫の転勤、私の手術、母の死と続き、一年半、私は自信をなくして心しまない日が続いた。弁護士に向いてないと悩んだりもした。ところが、

ありがたいことに、この秋、徐々に元気回復し、あまり気負わず自分の能力不足ともつきあって、長く仕事を続けたいとの心境となっている。

主婦から公民館主事へ

金子 富子

生涯教育が叫ばれ、一中学校区一公民館を旗印に、豊田市ではここの数十年の間に、中央公民館一、地区公民館十七と、その拠点作りに力が注がれてきた。

私は九年前に恩師の紹介で豊田市の社会教育指導員としてこの道に入り、公民館の定着とともに公民館主事へとそのまま移行して今日に至っている。

現在の地区公民館の館長・主事の身分は市の非常勤特別任用職員で、教育委員会から第三セクター方式による文教施設協会に無給派遣される。勤務は週三十五時間未満のパートである。館長は校長や市職の退職者が多く、また主事は子育てを終えた主婦がほとんどで、教師経験者

が目だつ。

公民館の実態を県内の他の市町村と比較してみると、建物の数は他市をグンと引き離しているが、職員は専任の公民館主事も、社会教育主事も一人もない。国の行財政改革に添って、わずかにいた専任職員もすべて引き上げとなった。専任職員一人分の予算で何人もパートが雇え、おまけに労働意欲に燃え、場を与えられたことに喜びを持ってオーバークラックを承知で働く主婦ばかりを容易に雇えるのである。

近年、豊田市にも多くのカルチャーセンターができ、企業も行政もそれぞれのセクトで数々のイベントを組み、社会教育に力を注いできている。そういう状況の中で、地区公民館の管理運営も年ごとに困難を極めてきている。一方で、公民館は毎年新築されるのに、中で働く職員は、相も変わらずいつ首を切られるかわからない、専門的な知識も満足でない、パート職員ばかりである。

私のように何の資格も持たない平凡な

主婦にチャンスを与えられたことを今も感謝しているが、公民館主事としての仕事は非常に高度で、専門性を必要とする。されど、そのための研修の機会は思うように与えられず、答えは、「走りながら自分で学べ」であった。働きながら必死で通信教育を受け、やっとの思いで社会教育主事資格を手にはじめて、社会教育の何たるかがおぼろげながら理解できてきた。その実績が認められ、県教委主催の社教主事講習に、それまで市職しか派遣されなかったものが我々の仲間から優先されるようになったことは大変嬉しい。

主事の中にも、もっと研修の場を与えて欲しい、もっと身分的な保障を、と願う人と、あくまでも主婦業のかたわらでという域を出たくないからあまり要求されたりするのはかなわないという人々とに別れる。

社会教育施設としての公民館の今後を考えると、真に住民の社会教育要求に応えられるだけの専門性や独自性をそな

えた職員が必要であるし、十分に熱情を傾けて打ち込める勤務条件や身分保障が不可欠であると思う。

家庭料理のピッチャーになって

森川 久美子

(森川家庭料理教室)

私があこがれて作り始めた家庭料理は、たとえてみれば、打席に入ったバッターに、いつもホームランかヒットを打たせたいと願って投げるピッチャーのようなものと言えそうです。バッターは、家族であつたり、友人であつたり、自分自身であつたりするわけです。ピッチャーがバッターを熟知していれば、健康状態や好き嫌い、おなかの空き具合などを、タイムリーに読むことができます。絶好球を投げ入れてあおいしかった、楽しい食事であつた、と満足させることが、いつもできます。

人に私流の家庭料理を教える時、まず自分の目で見て、手でふれて、納得した

材料を使うことから始めます。人にやとわれていたら、まず一番初めの作業ができないことが多いのです。仕入れる店が定められていることが多く、また一定の量を仕入れる場合は、品揃いがむづかしいなどがあるからです。今日は菜っぱが安くて新鮮だから使いましょうとか、生きのいい鰯が偶然手に入ったから、

急ぎで予定を変更して、献立も組み変えましょう、というようなことができません。家庭料理ならできる、臨機応変なたくましさやおもしろさが味わえないのです。料理を学ぶのなら、予算が少なくても、時間がなくても、魔法の呪文をとないでいる間に、その場にふさわしい料理を創り出す技術を身につけていただきたいと願っているのです。ほかにではなくて、ここだけにしかないという魅力を、少しづつ蓄えていくこともできるわけです。そんなふうに歩き始めて四分の一世紀が過ぎてしまいました。そこで手しおにかけて工夫をこらした献立の数々を私の手もとから飛び立たせよう、どこまで飛

んでいけるのか見てみようと思うようになりしました。

この度、八東海BOCVの手により、料理の本が出版されるという形で、実を結ぶことになりました。その選択は、どこよりも良い形で仕上がると思ったからにはかなりません。それは、初めて八東海BOCVの部屋を尋ねたときの第一印象で裏づけられ、私の選択は間違いないなかつたと再確認できたことです。八東海BOCVの不思議な印象、それは広い原っぱで気心のわかった人たちが、肩いせ合って作業をしているというごく自然な、しかし広がりをもった姿でした。雨が降ってきたらテントを張り、風が吹いてきたらおおいをして、また作業にとりかかる。地震が起きたら、りっぱなビルは倒壊する危険を常にもっているけれど、彼女たちは組んでいるスクラムをしながらにとき、危機をさけた後、前よりも強いスクラムを即座に組み立てるのではないかという、安定した強さのようなものを感じ取ったことでした。

家事代行業をはじめて

諏訪部 美和子

友人と「清掃の代行」の法人を設立して半年が経った。新聞で紹介されたこともあってお得意様も増えてきた、とはいってもまだ十数軒ではあるが……。

二人一組で各家庭へ行つて掃除をするのだが、父子家庭、老人世帯、単身赴任者、妻に先立たれた方、子どもが入院し母親が看病するため病院へ付き添っているなければならず家には寝たり起きたりのおおあさんと幼い子がいる家庭など、事情はさまざま。ただ、すべての家に共通するのは、きれいにしている家からしかお呼びがかからないということである。

事務所は一宮市にあるが、ほとんどの仕事場は名古屋市内だ。仕事をやる人は三十代から五十代までの主婦ばかり約二十人。「私は長い間、寝たきりの姑を看できて、少しの間だけでも代わってほし

いと思った。自分でもこういうことを始めたいと思っていたがどうやったらいいのかわからないままに今まで来た。ただお手伝いならできる」と言ってくださる人が結構多い。

私たちがそういう人を選ぶ基準は、電話の応対ぶりにある。電話で感じの良かった人に会って裏切られることはまずない。「電話とは怖いものだ」というのが私の実感だ。

この仕事を始めた動機は、六十年一月に八東海BOCVで、「主婦の壁を破るセミナー」が開催されることを朝日新聞で知り、早速申し込みをした。それまでは漠然としていたものがその話し合いの中で自分なりに整理ができてきたから。この記録は学陽書房から『何かをしたい主婦のために』の題で出版された。

三十五歳の主婦が組織の中で頑張れるチャンスは数少ないだろうし、これはと言える能力のないことも自分が一番知っている。外へ出て仕事をする女性だけが尊いわけではないが、常日頃から自分の

パン代くらいは自分で稼ぎたいと思っている私には、有能な女性が家庭の都合で不本意ながら職場を去らなければならぬのをとても残念に思う。そういう人を支える人にならねるのではないか。

当初、赤ちゃんを預かろうと考えた。生後半年経たないと保育所に預かってもらえないと記憶しているが、育児休暇がそれほど取れる恵まれた人は少ないだろう。まず資格を取らなくては、日当たりの良い広い土地を借りなくては、建物を建てなくては。朝お母さんは忙しいだろうから家まで迎えに行こう、でももし事故でも起こしたら取り返しつかないことになってしまう。しかも資金もないのだ。この計画はだめ。あれやこれや考えて、今の仕事に落ちついた。

なぜ仕事をしたのか考えた。自分自身ものを持つていたい。たとえば夫の会社での地位、子どもの学校での成績等は自分自身を示すものではないということとをセミナーで教えられた。

自分の老後のことを考えるにつけ、生

きがいともなるだろうし、死ぬまで自立した人間でいるためには今から備えなければと思う(せめて心がまえだけでも)。それに何より今の幸せは保証されてはいないということ。精神的、肉体的、経済的に力をつけておきたい。このことは家族にとっても喜ぶべきことだと思う。

仕事をするようになったの収穫は、当然ながら知り合う人が増えた。私の財産である。子どもの家事参加は以前からあったが夫も協力的になったこと。「今、おまえも自分のために生き、俺も自分のために生きている」という言葉が夫の口から出た時、「やった!」と内心こおどろいた。今のところ我が家は安泰なり。

専業主婦十五年、そして自立

横田 美佐子

二十年前、子育てを自分の手で決めたとき、いずれ子どもとの密着が終わったら仕事に戻りたいと考えていました。けれど、それまで勤めていた仕事には

戻れそうもない。だったら、十五年くらいかかる子育ての中で、何か一つプロになれるものをみつけよう。こんなに多くの人々が子育てをしているのだから、自己実現に結びつき、仕事になるものがきつとあると考えて、衣・食・あそび、学習、PTA活動等々、折にふれて記録し、そんなつもりで取りくんできました。

小学校高学年、わかりあえない親と子のずれを、けんめいになればなるほど對話がちぐはぐになる情なさを体験したと、PTA活動の中で、PとTのとめどもない平行線のもどかしさ、また、子どもの通う中学が、土足で家庭の中まで入りこむ不愉快さをたびたび体験し、それを母親たちとの話にのせても、共感しあえる人はむしろ少なく、危機感を感じていたとき、『親業』の本に出会い受講しました。

親と子は他者、別個の人格なんだ。だから、自己を大切にすると同時に、子どもも大切にとり当たり前のことが、グループの助けをかりて講座の中で気づい

ていくプロセスを、面白いと思いまして。人間関係を正面から考え、自分とはどんな価値があるのか、どんな欲求があるのか、そんなふうにむきあったことがなかったからでしょうか？

現在、親業訓練協会のインストラクターとして登録して、四年余りです。協会と自由契約というのが気に入っています。自らの行動を管理しての生活です。名古屋市の中心にある中日文化センターでの講座を拠点に、教育委員会や青少年婦人課等、行政から依頼される講座、統けて自主活動のグループに成長するようフォローアップ、加えて講演会、勉強会等の講師が主な行動です。手をぬくとすぐ仕事はとぎれます。

子どもの自立をテーマに、親と子のコミュニケーションを手がかりに二十五名、週一回三時間で八週間かけた講演が終わるたびに、一番成長したのは私自身だなあといつもおもいます。子供の自立を育てるプロセスは、また、親の自立の道すじでもあるわけで、自分の目で見、

耳で確かめ、頭で考える、そして自分を悟れる親のグループがそこに出て来るのを楽しみに、これからも講座をいねいに育てたい。元来家庭の中の問題だった親と子の関係に家庭教育が、公の場で扱われるようになったのは、十年くらいの歴史でしょうか？ 家族の手にあまる親子の問題を扱う機関のネットワークが、上手につながってればこんなに苦しまなくてもと思う人びとに出会います。講座で出会うグループ、専門家が、有機的につながるようネットワークが作れないかが、今年の課題です。

パートで働いて

渡久地 政子

九月七日付、中日新聞の社説「これによいか、主婦のパート」が目にとまった。「主婦が対外経済摩擦の一因だ」には恐れ入ってしまった。私もパートで働く一人だから。

主婦の標準の人生ともいえる結婚、子

育て、義母の看取りを終えたとき、私は四十二歳になっていた。以後三年半、大衆食堂のパートをしてる。

特別の専門も技術も免許も持ち合わせない中年のおばさんの職場は限られたものだ。正社員としての就職は望みようもなく、この近くの工場やスーパー、レストランの求人や職安のパートは、平均時給五百円、四十歳までである。

たしかにひどい人生の折り返し点だと思ふ。そんな状況を社会全体の問題として考えるのではなく、主婦にあたり散らす大新聞の社説もへんなものだ。私はヤレヤレと思いつつ、それでもやっと世間の目にとまったとも思う。パートという形であっても、働く場所に存在しているから問題にもなった質より量。これからその存在をテコにして、働くことは人としてあたり前、お金も時間も保障もわかりあい、とにかく人間らしく生きられる社会を創っていく過程なのだ、と思っている。

新聞紙上の統計をみるまでもなく、私

のまわりの主婦の大方はパートで働きたした。二十年ほど前、「あの子、鍵っ子なんだって。かわいそうね」と、働く女の人への同性からの悪意にみちた風あたりは、子どもまで巻き込んで、PTA子ども会の役員選びでよくいざこざをおこしていた。母親が外で働くのは悪いことだという意識は、たしかに変わりつつある。最も変わりにくい人の意識が変わるときには、たかだか二十年そこらでも変わるのだ。その意識の変化を私は深い感動で受け止めている。

大きな時代の流れの中で、壁をつき崩すきっかけになるかもしれない。いや、やはり大きな落とし穴だろうか。たしかにパートの条件はなさけないほどひどい。高校生の娘のアルバイトの条件より悪いのだ。

最も平均的な主婦の人生の視点から、パートを、これからも考えていきたい。



自立する団体として

＝政党・党派の介入とのたたかい＝

一九四六年三月創立以来、世界の平和を——婦人の解放を——民主主義の確立を——と幾多の女たちの力を寄せ合って精力的な活動を続けてきた婦人民主クラブ。

しかし、三十八年におよぶその歴史は決して平坦な道ではありませんでした。外部の政党・党派の介入によって大衆団体としての主体をおびやかされ、自立のための苦渋なたたかきも繰りかえしてきました。

そもそも、大衆団体に掲げる市民の運動と政治党派のかかわりはどうあるべきか——。

この問題は社会の革新をめざす運動にとって重要な課題だといえましょう。その意味でこのパンフを生きた証言として多くの方に読んでほしいと願っています。

△申込先▽

●頒価 三〇〇円

婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3―31 118
電話 〇三(四〇二) 三二四四

老人を介護して

石川 房子

——いま、いちばん食べたいものはなに？ 食欲も少しもどってきただころ、ふとたずねてみる。——「自分の好物が食べられなくなるときは、もういけなくなる時だと聞いているから、食べられるかどうかおすしをとってみてほしい」。聞きとりにくいながら、言うことはよくわかる。まだ離乳食のようなものばかり与えていたが、どうしてもというので危ぶみながら近所のすし屋にたのんだ。やがて少しずつ口へ入れ、よくよく嚙んでいくつかを食べることができた。——「このすし種はあまりよくないね、もうこの後おすしを食べられるかどうかわからないというのに」、と言う。わがままと言えないことはないが、単なるわがままと怒る気にもなれず、たかがおすしとはいうもののちょっと暗澹たる思いでもある。

事、これに限らず、これから先どのくらい生きられるかわからないのだから、それが最後かもしれない、という切実な思いがすべての言動に先立っているのである。

やがて遠からず人生の終末を迎えようとしている人の持つエネルギーは、その向かう方向が、まだそこまで年齢の達していない人の発するエネルギーの方向とはどうも違うようだ。お互いのエネルギーの目指す向きが同じ方向ならば、喜びも嘆きも共に同じ思いで味わえて気が楽であるのに、一方はすべてに死を予感しておのき、死のフィルターをおとして森羅万象を感じ、他方はまだしばらく生にどっぷり浸っている気分であるものだから、どうもくい違ってしまう。ことのほか、肉親というのは厄介なものだ。母は一つ一つの動作が真剣そのものである。いつも「迫りくる死」に対して身構え、「生きよう」とする意志が直結している。いい加減な応待が許されない。ごまかすこともできない。死への怖れにも、体の苦痛にも、ほかの人は肩代わりすることができない。そのことが、介護する者の疲労となつて積もってくる。「共に喜び、共に憂い」とはよく言う言葉であるが、これから去ろうとする者と、いまを生きている者との間に明らかな隔たりが出てくる。人間は小手先の裁量などどうにかなるものでは決してなくて、とどのつまりはお互いの中に巢喰う度し難さのやり場に困惑したり、ひとそれぞれ最期はほんとうの孤りであって、ひと

りその身を処してゆかねばならないと戦慄したり、なのだ。

老いと、遠からぬ死とのただ中にある人がそこにいる、そのことだけで私の「ありよう」のすべてをゆさぶるほどの力を出している。いま、私どもの手にあまるほどの要求を必死で訴えている人と、日々のささやかな営みをくり返して日を過ごしている周りの者たちとの間には、はるかな距離の横たわること、さらに「老い」が決して人間としての衰えを意味していないことは驚きであった。同時にそれはどちらがホンモノの人間らしい姿勢であるかの問いかけでもあった。

——とても重いものです。母の存在そのものが——と言うと、たいいていの人は不思議そうな顔をする。——だつて自分の本当の親でしょう。本当の親というものは、そりゃ舅や姑とはちがうのじゃないかしら。そんなこと言つても結局はお互い幸せなのよ。そんな答えが返ってくる。

同じ仲間うちでありながら異なつた考えを持つことを「同床異夢」と言うが、「同窓異景」とでも言つたらいいのか、老いた者とまだ間のある者は同じ窓から同じ方角を見ているのに、見えている景色はそれぞれにだいぶ違つて見えているらしい。「刀斧(ちようふ)斬(き)れども開(ひら)けず」刀や斧で断ちきつても親子はきれない——と何かで読んだ。肉親の介護は祈れども開き得ぬ者同士、生と死のあわいで作業せざるを得ないところに、このズシリとした重さが身にこたえるのであらう。

人智をあまり斟酌(しんしゃく)へしんしゃくしないでやってみよう。いま、病人にふりまわされているこの「その時ぐらし」が、愛情であるか孝行であるか、そんな判断は全くおあずけにして、体を動かさざるを得ないのだ。多かれ少なかれそんな風にするはかない時は誰にでもあると思うのだが。

老人の心の底からの全存在を賭したような願いは、常識的な判断であなどったり、身をかわしたり、ましてや裁くことなどとてもできない。不手際に受け止めて共にぶざまに傷つき、傷は私の底に鍾(かね)となつて居座りつづける。

ふしぎなのは魂である

完(みごと)いたましい腐(くさ)れている

碎(くず)けているときのみ塊は完全である

一九二七年、二十九歳で歿した八木重吉の詩

—— なにか楽しいことないかなあ！ ワッとおもしろく笑うことないだろうか。羽ではばたいて飛びたい、でなければどこまでもどこまでも電車に乗りつづけていたい。せめてただふつうのくらしがしたい！ ふっと、こんなことばかり考えるようになった。家の中から歌や音楽がひとりでなくなっていく。そのうち私の顔から笑いも失われそうになる。ときどき頬の筋肉をクシクシヤと動かして笑い顔を作ってみる。母と顔を合わせる前には顔の筋肉の運動をしてほえみの練習を試みた。

それにしてもこれは自然ではない。どこかまずい。なぜだろう。たぶん私が無理をしているのにちがいない。私の持っている受け皿の限界を超えて受け容れすぎ、何かが碎けてゆこうとしているのかもしれない。そうしてみるとやはり病人を含めて、家族や手伝っている複数の人たちの、すべてがうまくゆくように調整することは至難の技なのだろう。短期間ならともかく、長くこの状態がつづくとすれば、何らかの工夫をしなくてはいけない。お互いのために。人智を斟酌しないでなどと言ってはられない。生命の維持に必要な本当に大切なことはもちろん最優先させ、希望は容れられるだけ容れて、次に余力があればおおむね望むようにすること、さらにどちらでもよさそうなことは、多少の不満を残しても時には切り捨ててゆこう。無意識にせよ、母には私を娘だからと見ている甘えがある。弱者としての老人は、極めて鋭敏にひとの心の奥に秘めた好悪をも嗅ぎとってしまう反面、「やさしさ」、それも表面だけのやさしさにすら憩いを求めざるを得ない哀しさを併せ持っているのも事実である。

「幻想としての孝行」「幻想としての愛」ではなく、極めて実際的に対処するほかはない。はた目には冷たく見えるときもあろうし、あきらめさせたり、私が思い切った顔を見せない時も作らねばなるまいか。そうすることがお互いのためにほんとうは必要なのだ納得してもしなくても、そうせざるを得ないのだからと自分に言い聞かせる。

いま、寝たきりの老人にしても障害のある人にしても、こうした手数のかかる人をその人らしく生活させるところは、社会にも家庭にも、人の心の中にも決して多くはない。これらの人たちを生産性とか効率とか能率という点で評価すれば、目に見える部分ではむしろ足を引っ張る存在である。私たちには社会の中からだけでなく、心の中にある非合理性にも目を閉じ蓋をしたいような気分がある。ほんとうは世の中も家庭も人間も、それほど表面的なものだけ

ではないのだが。

とりあえず共倒れにならないために、病人のニーズよりも、介護する者が大切だと思ふことを優先して、そんなことどちらでもいいではないかと思ふことは省略していった。しかし間もなくこれは少し違うのではないかというところに気づいたのである。それはピラミッド状にニーズに順位をつけて、上位に位置させるものは生命を維持するのに必要な事がらとし、以下これに準じてなどとグレードをつけるのではなく、考え方としてはもっと平面的に病人の要求事項をドラドラと横に並べて置いておくやり方のほうがよいのではないだろうか。整然とはなく漫然とである。人間の願いや要求は、それほど理路整然としているものではないからである。

医師など直接医療に当たる人がこれでは困るが、介助する者も医師と同じ価値観で病人のニーズを取捨することが、果たしてよいかどうかはむづかしい問題だと思う。なぜ平面的に漫然となのか、というところ弱者の訴えるさまざまな願ひは、その訴えた時においてみるとみな等価であると思ふからだだった。手数のかかることや自分であまりやりたくないことは、「お医者さんに止められてからだめですよ」などと言って切り捨ててゆけば、介護する者の手間ははぶける。付き添う者が、手際よく、能率をあげて、の方向に傾斜すると、弱者は自然に排除のシステムに組み込まれてしまうのだ。私たち健常者の何気ない言動も、よほど心してかからないと弱者の排除に傾き、「同窓異景」もはなはだしいことになってしまふ。年齢も、置かれてある状況も違うのだから、同じ窓から見える景色はひとりひとり違うのが当たり前ではあるが、心に余裕がいくらかある時はできるだけ病人に近い視座にあつて、「死」のファイルとを共有して事物を見ることができなくはないと思ふのである。結局、言葉であらわせば、手ぎわよく片づけようなどあまり思はず、さりとてルーズでなく、適切な判断と処理を、という平凡なことになってしまつて新鮮味もないが、平面図にすると弱者を真ん中にして重要だと思われる要求事項をそれに沿つた中心部に、まあ少し様子を見てもいいだろうかというほどのことをその周辺部に配置するのである。看護曼陀羅とでも言つたらよいだろうか。すべてを満たすことは不可能であるから何らかの方法で容量を減らすことになるのだが、それを納得させるか、ぼかしてすませるか、切り捨てるかなど、心をこめつつの手練手管が直接接する者に課せられる最も大切な能力となる。「能力」であるなら客観性を持った仕事として、能力を持つ人誰にでも代替できるはずなのだが、この接点の問題はそう簡単ではなかった。(続く)

〔均等法・派遣法、そして……〕

◆NHKの番組の誌上再録、国会の答弁など貴重な資料があり、講義に参考になった。労働の場での女性差別の資料があればのせてほしい。女性の女性による女性のための唯一の出版社として、地域に根ざしつつ、日本と世界を見渡した活動をさらに続けてほしい。

（京都・渡辺和子・教員）

◆教材さがしの中でこの本を見つけ、読みました。たいへん参考になりました。

しかし、考えてみると、限りなく報われることのない底辺労働者（定時制生徒）の労働問題を考えるのに少し距離があるように思いました。アゴラゼインに登場された方々、残念ながら底辺労働者のことをおわかりでないようです。少し彼らのことを視野に入れてください。

（四十代女性・定時制教員）

〔ナイロビが語りかけるもの〕

◆貴重な文献です。すばらしいお仕事、ありがとうございます。

（東京・藤田たき）

◆今までもましてトータルなものが出来ましたね。こうして活字にしてまとめて伝えるものがはかにならないほどフェミニズムメディアが弱体ななかで、すばらしいものだと思います。

（東京・ヤンソン由実子）

◆内容が固苦しくなく、とてもユニークで、

読ましていただくのが楽しく拝見していました。だきました。とりわけ最後の「私にとつてのメキシコ・コベン・ナイロビ、そして……」は、国連婦人の十年の歩みのポイントが把握でき、変わりゆく世界の女たちの姿がわかる気がし、私にはいい勉強になります。

私は労組育ちですので型にはまった文章しか書けず、いつもはがゆく思っていました。

ありきたりの固い文章では誰にも読まれないし、最近の労組の機関紙は、せっかく送っていただいても見出しだけで終わるほうが多いのです。世の中は、良い悪いは別にして変化していることは事実ですから、労組の機関紙などほもつとユニークでなければ組合員は読まないでしょうね。

男女雇用機会均等法が四月から施行となり

ますが、労基法改正問題を含めて、働く女性には気の重いことですね。二〇〇〇年に向かつて歩み続けるには、働く女性はもちろんのこと、労組がもつと女性問題に目を向けなければ、日本の労働者の労働条件がさらに低下の道をたどることになるのではないかと、番外地から案じています。

（和歌山・山本まき子）

〔編集後記〕

11年前あごら東海V、そして5年前あごらOC東海Vをスタートさせた私たち。中年女に再就職の門は狭く、「とにかくやるっきゃない」の思いだけで、少しずつ輪を広げてきました。その輪にかかわった人の、「こんな働き方もある」というリポート、どんなふう読んでいただけたでしょうか。

前進か後退か、考えこむことも多かった日々でしたが、大きな計画も近々発表できそうな状況になりました。お互いに、//いい春//にしたいですね。

（高橋ますみ）

〔おわびとお礼〕

先月号裏表紙の新聞記事は、共同通信の配信で全国の地方紙に掲載されたものです。各地のメンバーから「切り抜いて、本を売るのに活用しています」というお便りをいただきましたが、掲載分は、山梨日々の記事を古屋繁子さんが切り抜いて下さったものです。

配信して下さった松本さんと共同通信の方、掲載して下さった各地方紙の方、そしてご連絡くださった古屋さんはじめたくさんの方々にお礼を申し上げます。

（事務局）